

# 調査会社に委託しての日本語研究の開拓

ノートルダム清心女子大学 文学部  
教授 尾崎 喜光

## 1. 国立国語研究所における自前の調査

筆者は現在地方の大学の教員として研究・教育に従事しているが、2010年3月までは国立国語研究所の研究員として、日本語の調査研究に21年間たずさわった。

現在当研究所は大学共同利用機関法人の一つとなっているが、2009年9月までは独立行政法人等の時代があり、現代日本語がどうなっているかについて、多数のデータを集めて分析する実証的研究を行っていた。

当時筆者は、敬語の使い分けや方言の共通語化等を研究課題とする話し言葉の調査研究にたずさわる部署にいた。

研究員になったのは1989年であるが、まずは中学校・高等学校の生徒たちが学校で敬語をどのように使ったり意識しているのかの調査にたずさわった。

2年後の1991年には、山形県鶴岡市において、多数の市民を対象とする「方言の共通語化」に関する調査研究に調査員の一人としてたずさわった。同市は国立国語研究所がこの研究課題により約20年間隔で定点観測的に調査を継続している地域である。1991年は第3回の調査の年であった。翌1992年には、この調査に関連し、前年の調査に応じてくれた回答者の一部（といっても175人もいるが）を対象に、「方言と共通語の使い分け」に関する調査を実施した。筆者はその調査の企画・実施の中心メンバーの一人であった。

さて、調査員としてたずさわった1991年の調査では、調査票に記された質問文によ

り一問一答形式で、方言の使用や意識に関する回答を回答者から得ていた。方言の特徴は音声にも見られることから（例えば、鶴岡市を含む東北地方では「柿」をカギと発音する）、用意したイラストを回答者に提示したり（柿の実のイラストなど）、調査票に書かれたなぞなぞ風の質問により、目的とする音を含む単語を回答者に口に出して言うてもらってデータを得ていた。

## 2. 調査会社に委託して言語調査をやってみよう！

こうした標準化された質問方法は、多数の回答者から適切に回答を得るためには必須であるが、この方法であれば、我々のような研究者ではなく調査会社の調査員にまかせてもほぼ同様に調査できるだろうという考えが調査中に芽生えた。調査会社への委託を考えた発端である。

音声に関する項目についても、調査会社の調査員に調査の現場で音声を判定してもらうのは無理であるが、録音さえしてもらえば、事後に私が聞き取って判定を行うことで調査が可能になるのではないかと考えた。文化庁文化部国語課では、「国語に関する世論調査」を、調査会社に委託して毎年行っているが、言語使用についても、回答者の「意識」を通して実態に近いところが把握できるだろうし、録音という方法を使えば、音声そのものの調査もできるに違いないと考えたのである。

そこで2009年に、全国の約800人を対

象に、言語使用に関する調査を新情報センターに委託して実施した<sup>1)</sup>。このとき録音調査も実施したが、無作為抽出された多人数を対象に、調査会社に委託して録音調査を行うというのは日本初の試みであった。おそらく世界でも初めてであったろう。誰も歩いたことのない道であるため、本当にうまくいくか多少不安もあったが、杞憂であった。受託した新情報センターも、これまで行ったことのない調査であるため相当プレッシャーがあったに違いないが、みごとに期待に答えてくれた。

本稿では、こうした委託調査の中から、2009年実施の全国調査における鼻濁音の使用に関する項目と、その約10年後に科学研究費補助金を得て委託した2018-19年実施の東京都での調査のうち女性語の使用に関する項目について、得られた結果の一部を紹介する。

### 3. 鼻濁音に関する全国調査

鼻濁音とは、単語の先頭以外のガ行音を、鼻にかけたガ行音で行なう発音である。ふつうの「が」ではなく、鼻から呼気を出しながらガギグゲゴの出だしを発音するのである。たとえば「鏡(かがみ)」の「が」が該当する。ガ行鼻音とも呼ばれる。

この鼻濁音は共通語の発音とされており、特に発音の正しさが求められるアナウンサーはこの発音が必須である。ただし地域差もあり、西日本の中国・四国・九州地方ではもともとほとんど用いられていない。また、東日本の中でも新潟県や群馬県などでは鼻濁音が用いられていない。

こうした鼻濁音を使う人が現在どのくらいの割合いるのかを調査した。

調査員には「自分の顔をうつすために使う道具は…」と質問してもらい、回答者に

「鏡」と言ってもらった。

2019年調査の結果は図1のとおりであった。「写真機」とか「カメラ」等、この調査では不適切となる回答や無回答があったため、有効回答数は712人である。凡例の「カ°」は鼻濁音の「が」、「ガ」は鼻濁音ではないふつうの「が」である。ちょっと変わった「nカ°」という発音もあるが数値は極めて小さいので、ここでは「カ°」か「ガ」かの二項対立で見よう。

これによると、「鏡」の「が」を鼻濁音で発音した人の割合は約2割にとどまることがまずわかる。じつは鼻濁音の項目は、「鏡」以外に数項目設けたが、鼻濁音で発音した人の割合はいずれもおおよそ同じであった。鼻濁音は現在でも共通語の発音とされているが、これで発音する人は2009年当時でも約2割にとどまる。共通語であるからには、少なくとも過半数の国民が使っていることが期待されるが、この数値から考えると、調査から10年以上を経た現在では、割合は更に低下していると推測され、鼻濁音は共通語の発音とはいいいくいの状況と推察できる。

これを更に回答者の属性別に見てみよう。

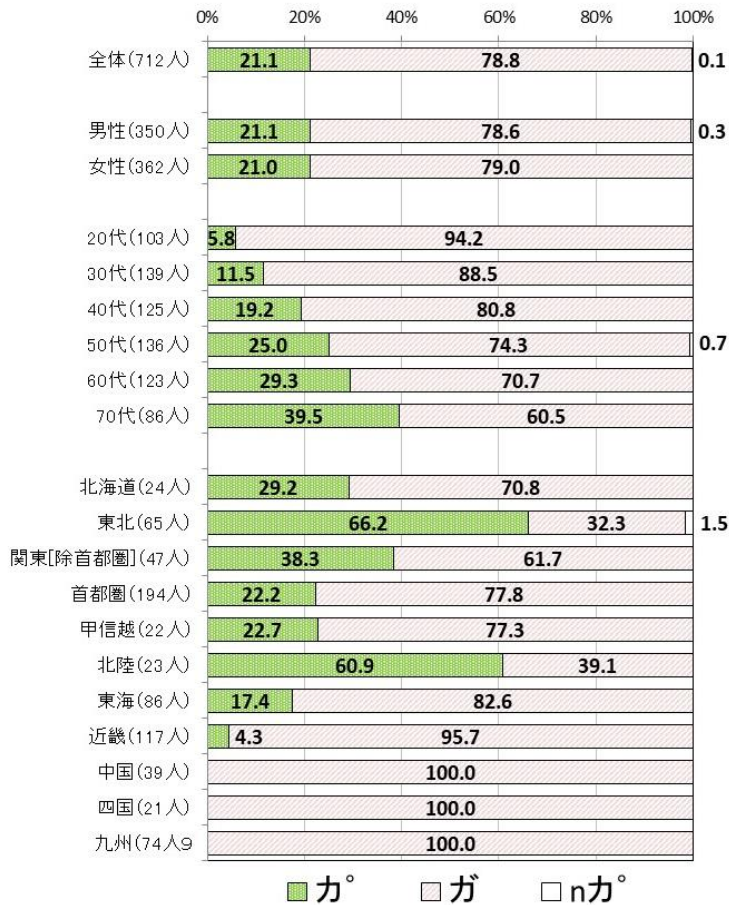
男女差はほぼないと言ってよい状況である。

一方年齢差は明確に認められ、若年層になるほど鼻濁音の数値は一貫して減少する。本稿での紹介は省略するが、札幌市で実施した2回の経年調査によると(2回目の調査は新情報センターに委託して実施)、やはり同様の年齢差が認められた一方、同時期出生グループ(コーホート)で比較すると、鼻濁音の数値にほとんど変化がないこともわかった。このことから、この年齢差を、個人が年齢が高くなると鼻濁音を使

い始めると読むべきではないと考えられる。つまりこの年齢差は、若年層になるほど鼻濁音を持っている人が減少すること、

すなわち鼻濁音が現在衰退しつつあることを示していると考えられる。

図1 「鏡」の「が」の発音



地域別に見ると、もともと鼻濁音をもっていない西日本（中国・四国・九州）では鼻濁音が皆無であることがこの調査からも確認される。その東隣の近畿は鼻濁音を持っている地域であったが、2009年当時もかなり衰退しており、風前の灯と言ってよい状況である。

これに対し東日本は、鼻濁音を持っている人の割合は相対的に高いが、全般的に多数派にまではなっていない。ただし、回答

者数が比較的多く数値が安定している東北地方では7割近くが鼻濁音を持っている。鼻濁音は、東北地方を中心とする方言音声に移行しつつある状況である。

#### 4. 東京都における女性による文末の女性語・男性語の使用率の変化

国立国語研究所の大型研究プロジェクトの一環として、東京都在住者約1,000人を対象とする言葉の調査（アンケート調査）

を1997年に実施した<sup>2)</sup>。電車の沿線等により東京都を6つの地域ブロックに分割し、人口規模が各ブロックの平均に近い市区を代表として選び、その区役所・市役所において住民基本台帳を閲覧し、各ブロックの人口に比例する割合で調査対象者を合計3,000人無作為抽出した。調査対象者にはアンケートを郵送して郵送で返送してもらい、約1,000人から回答を得た。自前による調査である。

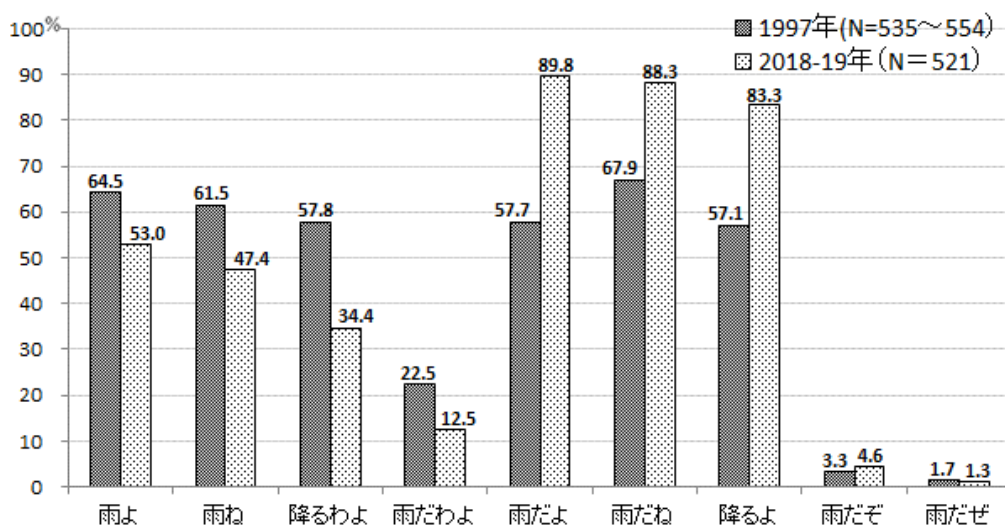
その調査から約20年後となる2018～2019年に、科学研究費補助金を受けて、同規模の調査を新情報センターに委託し、個別面接の方法により実施した<sup>3)</sup>。新規項目も多数あるが、約20年前と同一の項目もある。本稿ではその中から、文末における

女性語・男性語の使用に関する項目の調査結果の一部を紹介する。

回答者には、「(明日は) 雨だよ」ないしは「(明日は雨が) 降るよ」という内容を親しい友人に電話で伝える場面を想定してもらい、グラフに示した各表現について、自分で言うことがあるかないかを一つずつチェックして回答してもらった。郵送調査と面接調査という違いはあるが、基本的に同様の場面を設定し、提示する表現や選択肢も同様としたことから、この間の変化の有無をとらえる設計にした。

女性の回答者だけを抽出し、「言うことがある」と回答した人の割合、すなわち各表現の使用者率を示したのが図2である。

図2 東京都における女性による文末の女性語・男性語の使用者率



左側の4つの「雨よ」「雨ね」「降るわよ」「雨だわよ」は女性語であるが、約20年の間にいずれも使用者率が減少していることがわかる。一方、かつては男性を中心に使われていたその右側3つの「雨だよ」「雨

だね」「降るよ」は使用者率が増加している。すなわちこの約20年の間に、女性語の使用は衰退し、かつては主に男性が使っていた表現の使用が普及するという変化をとらえることができた。

もともと、これらの更に右側の「雨だぞ」「雨だぜ」という男性語の使用者率はこの間ほとんど変化がない。こうしたぞんざいを伴う男性語は、東京都の女性の間で、昔も今も変わりなくほとんど使われていないことがわかる。

### 5. 女性による「降るわよ」の使用者率の変化

変化について更に詳しく見てみよう。

図3-1は女性の「降るわよ」の使用者率を年齢層別にして2回の調査を比較したもの、図3-2は生年層別に比較したものである。生年層別の方は、2回の調査で重なる部分に注目して見てみよう。

図3-1 女性による「降るわよ」の使用者率（年齢層別）

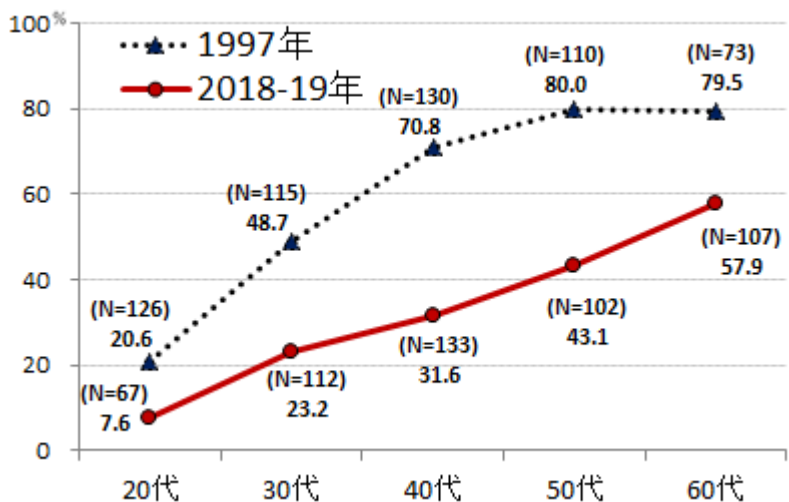


図3-2 女性による「降るわよ」の使用者率（生年層別）

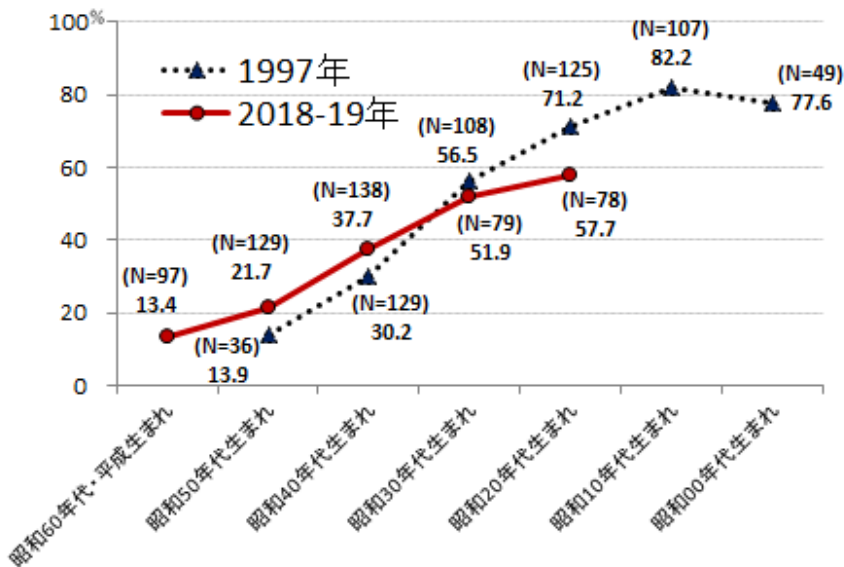


図 3-1 によると、「降るわよ」の使用者率はどの年齢層でもこの間大きく減少し、この表現の使用が全体的に衰退していることがわかる。

一方、図 3-2 によると、コーホートにおいては数値にあまり変化がないことがわかる。同一個人を追跡調査したわけではないため推測にとどまるが、この結果は、約 20 年たっても個人においては基本的に変化がないこと、つまり 20 代以降で「降るわよ」を使っていた人は使い続けるし、使わなかった人は使わないまま、ということを示していると考えられる。そうすると、「降るわよ」の衰退傾向の主たる要因は、各年齢層における構成員の入れ替え（使用者率が低い人々がその年齢層の新たな構成員になる）によるものと考えられる。

年齢層別の分析に加えコーホート分析まで行なうと、このようなことが見えてくる。

## 6. 調査会社に委託しての日本語研究

言語使用に関する調査においても、工夫して行なえば、調査会社に委託しての調査は有効な方法であり、貴重な知見が得られることがわかった。

さまざまな事情により自前での調査が困難となる昨今、調査会社を日本語研究のための“相棒”とするこのような委託調査は今後ますます積極的に検討されてよい。

(注) .....

<sup>1</sup> 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」(2006 年度～2009 年度前期)の一環として、「国民の言語使用と言語意識に

関する全国調査」という研究課題で実施した調査である。

- <sup>2</sup> 文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」（略称・新プロ「日本語」；研究代表者・水谷修；課題番号＝09NP0701）のうち研究班 2 の中の国立国語研究所チーム（チームリーダー・西原鈴子）の研究の一環として実施した。調査の企画・立案・実施の主担当は筆者。
- <sup>3</sup> JSPS 科研費 JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）の一環として実施した。東京都在住の 20 歳から 69 歳に対して、対象者の抽出は性・年齢による割当法（都内 100 地点）、調査方法は個別面接聴取法により実施し、有効回収数 1,049 票（音声データまでの完了は 1,039 票）であった。

## 【参考文献】

- 尾崎喜光 (2015) 「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」 ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編, 39-1
- 尾崎喜光 (2022) 「東京都における話し言葉の男女差の時代変化とコーホート分析から推定する個人内変化」 ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編, 46-1

## 筆者プロフィール

尾崎 喜光 (おざき よしみつ)

長野県上田市出身。1986年北海道大学文学研究科言語学専攻 修士課程修了、1988年大阪大学文学研究科日本学専攻 博士後期課程単位取得満期退学。国立国語研究所言語行動研究部第一研究室 室長、独立行政法人 国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ 主任研究員、大学共同利用機関法人 国立国語研究所時空間変異研究系准教授等を経て、2010年よりノートルダム清心女子大学文学部日本語日本文学科教授に就任。

